

ノルウェーの歴史家ムンクのスカンディナヴィア主義論

——第一次スリースヴィ戦争期を中心に——

大 溪 太 郎

一、はじめに

一九世紀ノルウェーの「国民形成」の過程においては、一八一四年までの四世紀以上にわたるデンマークの支配が残した文化的影響の克服と、一八一四年の独立運動を経て一九〇五年まで続いたスウェーデン王を君主とする同君連合体制における、自立性の獲得が最大の課題であった。そうした国民形成の諸潮流のなかで異彩を放つのが、北欧の民族的連帯を謳ったスカンディナヴィア主義である。文化人の交流として始まったスカンディナヴィア主義は、一八三〇—六〇年代にはユトランド半島南部のスリースヴィ（シユレーズヴィヒ）公爵領をめぐるデンマークとドイツ

との紛争のなかで、軍事同盟や政治的連合を目指す運動へと展開した。その中心は学生・知識人であったが、デンマークでは自由主義と国民国家形成への要求に一定の親和性を持ち、スウェーデンではロシアの脅威への対抗とフィンランドへの領土的欲求という、軍事・外交上の利害に共鳴する部分もあった。^①

これに対してノルウェーでは、ドイツ・ロシアといった仮想敵の欠如、国内の民族ロマン主義との競合などから、スカンディナヴィア主義の支持基盤は広がりをもたなかった。^②一八六四年の第二次スリースヴィ戦争（デンマーク戦争）に際する「兄弟民族」救援への一時的な熱狂を別にすれば、スカンディナヴィア主義はデンマークの文化と同君連合体制を後ろ盾とする、官僚や一部知識人の保守的傾向

として理解されがちであった。⁽³⁾

しかしサンネス (John Sannes) らが明らかにしたように、ノルウェーで一八三〇—四〇年代にスカンディナヴィア主義を受容したのは、必ずしも親デンマーク・親スウェーデン勢力ではなく、一八一四年の独立運動の成果としての「自由」を掲げて官僚主義体制とデンマーク的文化を批判する「愛国派」(patrioter) が中心であった。この一見ねじれた状況の背景には、デンマークの自由主義者がノルウェーの一八一四年憲法を理想としたことで、ゲルマン的「自由」の担い手というロマン主義的自尊心が刺激された面も指摘される。⁽⁴⁾

本稿で取り上げる歴史家ムンク (Peter Andreas Munch 一八一〇—六三) は、こうした人々とは逆に、デンマーク的文化の継承・発展を主張して政・官・学界の指導層を輩出していった「知識人派」(intelligensen) に属し、その中でもとくに「デンマークびいき」(danoman) と批判的に呼ばれた一人であった。ムンクはノルウェーの民族的純粋性・固有性を強調する歴史観で民族ロマン主義に大きな影響を与えた一方、スカンディナヴィア主義を厳しく批判し、その対案として「パンゲルマン主義」⁽⁵⁾ を論じたことでも知られる。

ムンクは一八三四年にクリスチャニア大学 (王立フレゼ

リク大学。現・オスロ大学) を卒業し、師でありのちに同僚となるカイセル (Rudolf Keyser 一八〇二—六四) とともにコペンハーゲンで史料収集に従事したのち、一八三七年にクリスチャニア大学歴史学講師に就任した。一八四一年に教授に昇任して生涯その地位にあり、カイセルとともにノルウェー歴史学界の中心人物であり続けた。一八五一年に刊行が開始された未完の名著『ノルウェー民族の歴史』(Det norske Folks Historie) のほか、国内外の史料の収集・刊行とそれに基づく論考の発表を精力的に続けた。一八五九年からはローマに長期滞在して中世史料の収集を行い、一八六三年に同地で急死した。⁽⁶⁾

ムンクの歴史家としての業績に関しては、ダール (Ottar Dah) の『一九・二〇世紀におけるノルウェーの歴史研究』の整理が最も包括的である。ムンクとカイセルを中心とする一派は「ノルウェー歴史学派」(norsk historisk skole) と呼ばれ、厳密な史料批判と言語学・考古学の知見を導入した近代的歴史学を築いたとして、高い評価を与えられた。⁽⁷⁾

サイプ (Anne-Lise Seip) は、ムンクの「ナショナル」「親デンマーク」「スカンディナヴィア主義批判」「パンゲルマン主義」といった多様な側面を検討し、北欧と諸ネイションの中でノルウェーの独立した正当な地位を見いだそ

うとする「国民形成者」(nasjonsbygger)であったとの全体像を示した。サイプは、一八四〇年代中期のムンクを北欧の文化的・精神的一体性を語った「文化的スカンディナヴィア主義者」と規定した。またムンクが第一次スリースヴィ戦争(三年戦争、第一次デンマーク・ドイツ戦争。一八四八―五〇年)下の「一八四八・四九年に、政治的スカンディナヴィア主義への批判と、パンゲルマン主義を明確にしたことを論じ、ここに彼の「政治的転向」を見いだした。サイプは「国民形成者」ムンクが、北欧・スカンディナヴィアという枠を超えた「世界市民」に生まれ変わったと結論づける⁽⁸⁾。一方セーレンセン(Oystein Sørensen)は、啓蒙思想に軸足を置いたムンクが結果的に民族ロマン主義に影響を及ぼした事実と、スカンディナヴィア主義批判から「パンゲルマン主義」への展開を重視しているが、相互に矛盾しうるこれらの関係をあまり問題視していない⁽⁹⁾。

このようにムンクの多様な言説を統一的に整理することは、彼を国民形成史のなかに位置付けるうえで重要である。しかし、スカンディナヴィア主義に対する発言の揺らぎや、デンマークへの文化的敬意と劣等感といった感情を平均化して、「スカンディナヴィア主義者」あるいは「反スカンディナヴィア主義者」と規定することは、その複雑さを見失わせるのではないだろうか。また、ムンクが「コ

スモポリタン」を自称しつつもノルウェーの「ナシヨナルな」立場にこだわるとき、彼の「パンゲルマン主義」を「世界市民」的と理解することが妥当だろうか。サイプは、ムンクの一八四八・四九年から五〇年代後半までのスカンディナヴィア主義に関する言説を一体として扱っており、そのことが平板な理解につながっていると思われる。

やや古い研究ではあるが、サンネスはムンクの「内的矛盾」を的確に捉え、ムンクが親デンマーク感情と反スカンディナヴィア主義との間で葛藤し続けたことに注目していた。それによればムンクが示したのはあくまで「デンマークびいき」としての連帯感である。また、ムンクは一八四五年以降に反スカンディナヴィア主義を明言して、「パンゲルマン主義」をその対案とするようになるが、この二つを対立的に捉えたのは彼だけであり、後者は思想上の遊戯にとどまったとも指摘した⁽¹⁰⁾。しかし、サンネスの関心は一八四八年以前に限定されており、その後の情勢変化のなかでの「内的矛盾」が論じられなかったことが惜まれる。

本稿では、ムンクの論理の変遷とそこに見られる葛藤に注目しながら、彼の第一次スリースヴィ戦争期におけるデンマーク問題とスカンディナヴィア主義に関する言説を検討する。そのことを通して、ノルウェーのスカンディナヴィア主義が抱えた、対デンマーク感情との複雑な関係の

一端を明らかにしたい。

二、ムンクと「移入理論」

ムンクがノルウェー人と北欧諸民族の「ナショナルリテート」⁽¹¹⁾を論じる前提となったのが、古代北欧の民族移動に関する「移入理論」(innvandringssteori)である。この理論はカイセルがその大枠を提示し、ムンクが詳細に展開したが、両者には若干の相違もある。

ムンクの学説の典型的な説明では、ゲルマン人を「ノルド人」(de nordiske folk、北ゲルマン人)「ゴート人」(goterne、中ゲルマン人)、そして「本来のドイツ人」(de egentlige tyske folk、南ゲルマン人)の三つに分け、これらが時間差をもってバルト海東方から北回りに北欧へ移動したとする⁽¹²⁾。まず「ドイツ人」が移住して南下し、次に「ゴート人」、最後に「ノルド人」が続いた。先行した「ドイツ人」「ゴート人」を「ノルド人」が駆逐・征服して南下したことになる。七二〇―三〇年頃に比定される戦いで「純粹北方ゲルマン系」王朝がデンマークの「半ゴートの」王朝を打倒し、その結果デンマークにも最終的に「ノルド的」ナショナルリテートが確立したという。南・北ゲルマン人の二区分を軸としたカイセルに対し、ムンクの場合に

は、スウェーデン南部とデンマークにおける独自の存在としての「ゴート人」を第三の区分として明示したことが特徴として挙げられる⁽¹³⁾。

こうした歴史観はノルウェー人の「ナショナル・アイデンティティ」と、その古代北欧における指導的地位への認識を生んだ。ムンクは、ノルウェーが「ノルド的要素が最も純粹に表れている筆頭国 (Hovedlandet)」「〔ノルド〕⁽¹⁴⁾民族の真の首座 (Hovedsæde)」であり、「サガ」「エッダ」といった古北欧文学への排他的な権利を有すると主張した。すなわち、これらの文学的遺産の形成にデンマーク人・スウェーデン人は関与しておらず、そこで用いられている言語 *norran* も、共通の「古ノルド語」ではなく「ノルウェー語」であったというのである⁽¹⁵⁾。

「移入理論」はデンマーク・スウェーデンでもある程度受け入れられたが、デンマークの考古学者ヴォーソー (Jens J. A. Worsaae 一八二一―八五)らはデンマークの「ゴート人」がノルド系民族であったと考え、この理論をデンマークの「北歐性」の論拠として理解しようとした。また、彼らはサガなどを北歐共通の文化遺産と見なし、これに激しく反発するムンクとの論争が続いた。ムンクがこの理論をスカンディナヴィア主義の前提となる民族的共通性、とりわけデンマークの「北歐性」を否定する議論に用いたこと

は先行研究でも広く紹介されているが、それは主に後述するムンクの一八四九年の論文に依拠している。⁽¹⁶⁾ムンクの代表的理論であり、ノルウェーの民族ロマン主義にも多大な影響を与えたとされるこの歴史観が、第一次スリースヴィ戦争期の政治情勢との関係のなかで発展・変容していく過程に注目する必要があるだろう。

三、一八四八年 ―デンマークの危機・北欧の危機―

本章では一八四八年の第一次スリースヴィ戦争開戦直後にムンクが発表した、デンマーク問題に関する論説を検討する。

デンマーク王は、デンマーク王国に加えて、スリースヴィおよびドイツ連邦加盟邦のホルシュタイン、ラウエンブルクの各公爵領からなる同君連合「ヒールスタト」(Helsat)の君主であった。スリースヴィにはデンマーク語系住民とドイツ語系住民が混在しており、一八三〇年代にデンマーク語使用の権利をめぐる紛争が生じると、ドイツ語系の「シュレースヴィヒ・ホルシュタイン主義者」はスリースヴィのドイツ連邦加盟を求めた。一方、王国のデンマーク人自由主義者「ナショナルリベラル」は、王国

ノルウェーの歴史家ムンクのスカンディナヴィア主義論

とスリースヴィからなる「アイダ川までの」デンマーク国民国家形成と自由憲法の制定を求め、北欧の「兄弟民族」に連帯を呼びかける政治的スカンディナヴィア主義の母体となった。

(1) 開戦とデンマークへの連帯

一八四八年三月、デンマーク王フレゼリク七世 (Frederik VII) 位一八四八―六三) は絶対王制の終焉を宣言し、ナショナルリベラルを入閣させるとともに、ホルシュタインを分離し、王国とスリースヴィには憲法を制定する意思を示した。これに反発したシュレースヴィヒ・ホルシュタイン主義者は臨時政府を樹立し、四月九日にデンマーク軍との間で戦闘が開始された。間もなくプロイセンがシュレースヴィヒ・ホルシュタイン主義者の側に立って参戦し、デンマーク軍は苦戦を続けた。

こうした状況を受けてノルウェーでもデンマーク支持の世論が高揚し、クリスチャニア(現・オスロ)では五月一日に王と議会(ストーティング)に参戦を請願する市民集会が開催された。ムンクもこの集会の呼びかけ人の一人として請願の趣旨説明の演壇に立つなど、デンマーク救援を先頭に立って訴える一方、⁽¹⁷⁾五月一日から六月にかけて有力日刊紙『朝刊新聞』(Morgenbladet)に「デンマーク問題」

に関する三本の論文を寄稿した。

ムンクはまず、デンマーク軍がその古来の防塁「ダネヴィアゲ」(Danevirke)において苦戦を強いられ、王国部の北ユトランドまで後退している状況に言及した。ムンクはドイツがデンマーク全土をドイツ連邦に併合して「諸国家の列から抹消しようとしている」と指摘し、その侵略行為を非難した。そのうえで「デンマークがドイツ化されたならば、ドイツ的要素がスウェーデンとノルウェーにおいてもますます影響力をもつことは避けられない」、「スウェーデンとノルウェーの最たる関心は、ドイツの横暴を止めることである」として、目下の状況はデンマークのみならずノルウェー・スウェーデンの危機でもあると強調した。さらに、北欧とドイツとの間に本来ある「親戚関係」に触れつつも、「ノルウェーとスウェーデンは北欧のナシヨナリテートの第三の部分破壊されるのを、座して見ているわけにはいかない」と述べており、ドイツ側の「侵略」の阻止を最優先としたのである。⁽¹⁸⁾

このようにスリースヴィイでの戦争を北欧共通の危機と見なす論拠として、ムンクは「移入理論」に基づく歴史観を示した。ここでのムンクは「北方人」(Nordboer)と「ドイツ人」(Tydskere)というゲルマン人の二つの集団を提示し、前者が後者を駆逐・征服して「南スウェーデン、デ

ンマーク島嶼部、そして「スリースヴィイの南側境界」アイダ川までのユトランド半島」に南下・定住したと説明して、以下のように述べた。

「ここに挙げた地域はすべて北方人によって同じように、同じ程度植民された。南ユトランドは「スウェーデン南部の」ユータランドやスコーネと変わらない。ドイツ人の過去の居住をドイツが「その土地を」回復する根拠にできると考える者がいるとすれば、その権利は恣意的に南ユトランドに限定されるものではない。その権利をもってドイツの正当な境界は「スウェーデンの」ユータ川とブロー湾に至らざるを得ない。」⁽¹⁹⁾

こうしてムンクは、アイダ川に至るまでの地域はスカンディナヴィア半島と同様に「北方人」の地であるとして、「南ユトランド」すなわちスリースヴィイのデンマークへの帰属を正当化した。それだけでなく、ドイツの言語学者グリム(Jacob Grimm 一七八五—一八六三)らが唱えていたスリースヴィイの「再併合」の主張は、スウェーデンをも脅かすと論じたのである。このときムンクが「移入理論」を、デンマークとノルウェー・スウェーデンとの差異の強調ではなく、北欧とドイツという二項対立を基調として、デンマークと共通の「北欧のナシヨナリテート」の根拠に用いていたことは、先行研究では注目されてこなかった。

(2) デンマーク政治の変化とノルウェー人

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン主義者の要求の根拠には、デンマーク王クリスチャン一世 (Christian I 位一四四八―一八一) が一四六〇年に両公爵領を「永遠に分離せず」と誓約したことがあった。こうした論理に対してムンクは、いまや「王冠」ではなく「人民のナシヨナリテートと主権」の時代であり、「埃をかぶった文書や条約」ではなく「現在のナシヨナリテートの状況」に基づいて問題が解決されるべきだとする。ムンクは、スリースヴィイではデンマーク語系住民が多数派であり、歴史的にも本来はデンマーク的な土地であったことを根拠に挙げて、同地は当然デンマークに帰属すべきものであると見なした。⁽²⁰⁾

ムンクがこのように君主ではなく「人民」を基礎に考えるとき、デンマーク支援を熱烈に訴えたとはいえ、デンマークの王家・政府に対する視線は厳しかった。ムンクにとって、もともと北ドイツの領主であったオレンボー家のデンマーク王たちは、いまだにドイツ人であり、彼らにはホルシュタインのドイツ人貴族や絶対王制下でのスリースヴィイのドイツ系官僚と同様に、スリースヴィイの「ドイツ化」を進めてきた責任があった。⁽²¹⁾ その一方でムンクは、この年のデンマーク絶対王制の終焉を高く評価し、次のよう

に述べた。

「あるのは古い、絶対主義の、ホルシュタイン的デンマークではなく、新しい、自由精神の、北欧的デンマークであり、それに復讐するのはやり過ぎであることが忘れられていると思われる。「連合時代に」ノルウェーを虐げた統治政策はもはやデンマークにはなく、スリースヴィイ＝ホルシュタイン貴族のもとに見いだされるはずだ。」⁽²²⁾

ムンクは、デンマークによるかつてのノルウェー支配に対する遺恨をドイツ人貴族に向け、新たなデンマークと和解するよう説いた。またデンマークの状況を「我々の自由と憲法」が懸かっていたノルウェーの一八一四年になぞらえ、絶対主義に対する「自由」と「独立」のための戦いであるとして、ノルウェー人の連帯を訴えた。⁽²³⁾ デンマークでナシヨナルリベラルが入閣し、自由主義への流れが見られるなかで、ムンクは彼らを少なくとも自由主義者としては評価していたことがうかがえる。

また、自身が以前からデンマーク人学者と歴史・文学の分野で論争を続けてきたことに触れたうえで、次のように、ドイツに対抗するためにデンマーク人と一時休戦すると宣言する。

「しかし、兄弟民族同士の些細な争いは、その共通のナシヨナリテートが脅かされている限り、全て沈黙しなければ

ばならない。目下の問題は、『北歐対ドイツ』であつて、『ノルウェー対デンマークまたはスウェーデン』ではない。和平が成つたらはじめて、中斷されたペンと言葉での闘いに取りかかる時なのである。⁽²⁴⁾

開戦直後のムンクは以上のようにデンマークへの全面的な支持を表明し、その文章には「ダネヴィアゲ」「北歐のナシヨナリテート」「兄弟民族」といったスカンディナヴィア主義者に特徴的な言辭が頻出する。しかし、デンマークの「人民」と彼らの自由への共感が強調される一方、スカンディナヴィア主義への直接の言及はなく、これらをもってムンクをスカンディナヴィア主義者と見なすことには留保が必要であらう。

四、デンマーク情勢の展開

デンマーク軍が苦戦を続けるなか、フレゼリク七世からの救援要請を受けたスウェーデン^{II}ノルウェー王オスカル一世 (Oscar I 位一八四四—五九) は、五月一日にスウェーデン軍一万五千名とノルウェー軍三千名の派兵を決定した。しかし両国政府は派兵に慎重であり、とくにノルウェー内閣では紛争に巻き込まれることへの強い懸念が示された。ノルウェー議会でも慎重論が強く、派兵のための

予算は、目的をデンマーク王国本土の防衛に限定し、和平に向けた努力と「デンマークとのそれ以上の持続的接近が図られない」ことを条件としてようやく認められた。実際に両国軍の一部が係争地ではなく後方のフューン島に進駐したのは、休戦の見通しが強まった六月のことであり、それ以前に北ユトランドへのプロイセン軍の侵入があつたにもかかわらず参戦は回避された。⁽²⁵⁾

スカンディナヴィア主義に共感をもつオスカル一世自身も、スウェーデン国内世論の変化や自由主義運動への警戒から慎重な対応を余儀なくされたが、王に最も大きな影響を与えたのはロシアの意向であつたとされる。ロシアはヨーロッパの現状維持を望む列強の一角であると同時に、ホルシユタインの一部に継承権をもつ直接の利害関係者でもあり、デンマーク・スウェーデン両国の接近と、プロイセンのスリースヴィへの介入との双方を警戒していた。スウェーデンはロシアをはじめとする列強の意向を受けて調停を進め、七月二日にマルムーで休戦を成立させた。⁽²⁶⁾ その後の和平交渉ではイギリスからスリースヴィ分割案が示されたが、ヒールスタト体制維持を重視するデンマーク政府の保守派はこれを受け入れず、一月にナシヨナルリベラルは内閣から去つた。

ムンクはこのデンマーク内閣の改組に関して『朝刊新

聞』に短い記事を寄せた。自由主義者がほぼ一掃された新内閣の構成について、国王が再び「反動的助言者」に耳を貸そうとした結果であつて、そこに見られるのは「古い王党派の時代精神」であり「デンマークの真の利益に沿わない」と批判した。ムンクの最大の懸念は、新内閣の多数派がヒールスタト支持者であり、そのことでスリースヴィのみならずデンマーク自体がドイツへ併合される危険をはらむ点であつた。⁽²⁷⁾三月以来のデンマークの政治的变化をおおむね肯定的に見ていたムンクであるが、これを機にデンマークの国王・政府への期待を完全に失つたのである。

五、一八四九年 — スカンディナヴィア主義批

判・パンゲルマン主義・移入理論 —

スリースヴィ分割による和平を拒否したデンマークは、翌一八四九年四月に戦闘を再開し、苦戦の末、七月一〇日のプロイセンとの休戦にこぎつけていった。シュレーズヴィヒ・ホルシュタイン主義者は後ろ盾を失い、状況は翌年の講和へと向かつていくことになる。

ムンクはこの年の初頭から八月にかけて、デンマーク情勢とスカンディナヴィア主義をテーマとした論文を計六本発表した。ムンクのこれらの論文は、ヴォーソーやノル

ウェーのスカンディナヴィア主義者たちの反論を受け、その後政治と歴史学とが絡み合った論争が展開されていくことになる。

(1) ムンクの状況認識

一八四九年春、ムンクは自らが発行した雑誌『民衆読本—ノルウェー国民のための月刊誌』で前年のヨーロッパにおける革命運動を概説した。ムンクは一連の革命運動をフランス革命以来の世襲・特権的体制と人民との対抗関係の展開として捉え、年末にかけて反動的動向も見られるもの、自由という観点からは総じて好ましい結果を導いたと評価する。⁽²⁸⁾またスリースヴィでの戦争を、シュレーズヴィヒ・ホルシュタイン主義者、プロイセン王、フランクフルト議会の知識人・市民身分それぞれの利害からなるドイツ側の「侵略欲」によるものと指摘し、デンマーク支持の姿勢は基本的に変えていなかった。⁽²⁹⁾

一方、前年には直接的な言及を避けたスカンディナヴィア主義について、「スカンディナヴィア共通のナシヨナリテートの感情」を喚起しようとする試みは、ノルウェー・スウェーデンの冷静な人々には反響を呼ばなかったとする。その理由は「要するに〔スカンディナヴィア主義が〕ドイツの統一運動と同じく非歴史的かつ非実際のだったか

らである」、また「そのようなスカンディナヴィア連合のもとでのコペンハーゲンの精神的そしておそらく政治的な支配という考えが、デンマークのまじめなスカンディナヴィア主義者においてさえ確固として拭いがたく根付いている⁽³⁰⁾」というものであった。ここで挙げられた「非歴史的」「非実際の」「コペンハーゲンの支配」というスカンディナヴィア主義の問題点は、ムンクのこれ以降の発言においても形を変えて繰り返されていくことになる。

そのうえで、ムンクはノルウェー議会在前年の派兵予算承認の際に表明した、「これはスカンディナヴィア主義の路線への、またデンマークとのより親密ないかなる連合への、いかなる前進とも決して見なされるものではない」という意思を強調した。デンマーク側への支持に変わりはないものの、もはやドイツの「侵略」は「北欧民族」(nordisk Folk)の損失とは見なされず、戦争が北欧全体の問題であるという認識は消え去っていた。⁽³¹⁾

(2) デンマーク・ナシヨナリテートの性格と移入理論

これに続いて三月中旬に『朝刊新聞』に連載した論文「スカンディナヴィア主義について」で、ムンクはデンマークの「ナシヨナリテート」について歴史的に論じ始める。

ここでの具体的議論は第二章で紹介したものと若干変

化している。すなわち、東方の原住地からバルト海南岸を回って移動した「ドイツ人」に対し、北岸を進んでからスカンディナヴィア半島を南下した「北方人」はバルト海の西側で遭遇した。その結果「現在のデンマークの地とスカンディナヴィア半島の南端部には当時完全なドイツ系の住民がいたことがある」とした。そしてこの「ドイツ人」の一派で、現在のデンマークを中心に居住していたのが、かの歴史的に名高い「ゴート人」(Göterne)であり、「デンマークの地こそがゴート人本来の故郷・根拠地であり、南への移動がそこから出発した」という。⁽³²⁾

この論文でのムンクの議論は、そうした遠い過去の「ナシヨナリテート」の関係を同時代の政治的問題に応用した点で、一八四八年以前のものから大きな跳躍がある。ムンクはデンマーク民族が今なお「多くの点で我々よりもドイツのナシヨナリテートのほうに近い」とし、「北欧的要素がいまだに最も純粹に生きているのはどこか。ノルウェーとスウェーデンにおいて最も純粹であり、デンマークにおいて最も純粹でない」と言い切った。そして、スカンディナヴィア主義者に対し、デンマークの「ナシヨナリテート」は、ドイツと「純粹北欧」の中間に位置する独立した尊敬すべき存在であるとの認識を求めた。⁽³³⁾デンマークの歴史的性格について、前年の議論とはほとんど逆の結論に

至っているのである。

ムンクのこの論文は日刊紙『王国時報』(Rigsdende)紙上で批判を受けた。この匿名の筆者は「移入理論」を否定し、デンマーク人は紛れもなくノルド系であると主張した。⁽³⁴⁾ それに対してムンクは、四月末に論文「さらにスカンディナヴィア主義について」で反論し、デンマークの元々の住民は非ノルド系の「ゴート人」であったと重ねて主張した。⁽³⁵⁾ また、デンマークの北欧性と、古北欧(ないしノルウェー・アイスランド)文学への関与を主張する批判者について、「デンマークのノルド人が北欧で最も古く、その最古の文化を所有すること」、および「デンマークの北欧における首位性」を正当化しようとする意図があり、「コペンハーゲンのスカンディナヴィア主義者が馬脚を現した」ものだと非難した。⁽³⁶⁾ このようにムンクの言説には、歴史学を援用して政治問題を論じるのみならず、逆に文化的・歴史的議論を政治問題と結びつけて反発し、スカンディナヴィア主義の是非をめぐる議論を自らエスカレートさせていった面も見受けられる。

(3) スカンディナヴィア主義批判と

ゲルマン主義への展開

この時期のムンクは、三国の連合を求める「コペンハー

ノルウェーの歴史家ムンクのスカンディナヴィア主義論

ゲンの」スカンディナヴィア主義への批判をとりわけ強めていた。「ノルウェーは一八一四年以来の三五年間、デンマークとの連合の支配下のいかなる時にもまして繁栄と力の高みに達している」と述べて、ノルウェー人としてかつての連合時代の再来への恐れを表明し、ノルウェー人はデンマーク人に共感するが、「デンマークとのいかなる連合をも願わない」と強調した。⁽³⁷⁾

また、自らのデンマーク人民に対する好意についても、スカンディナヴィア主義と勘違いしないよう求めた。ムンクはデンマーク人民への共感を表明し、言論活動を通じた支援を誓いつつも、自分は「あらゆる『スカンディナヴィア主義』に最大限抗議してきたし、常にそうするのである。スカンディナヴィア主義の小部屋は私には狭すぎる」と述べた。このようにスカンディナヴィア主義との同一化をあくまで拒否したうえで、ムンクが提示するのが「ゲルマン主義」であった。ムンクは、脅威はドイツからではなく「東方から、スラヴ主義から」来るのであり、「ゲルマン主義」がヨーロッパの自由の守り手として団結しなければならぬと述べた。⁽³⁸⁾ ただしこの時点での「ゲルマン主義」はデンマーク支持とシュレースヴィヒ・ホルシュタイン主義への批判を前提としたものにとどまっている。

四月の論文でムンクは、先述のようにデンマークとノル

ウェー・スウェーデンの差異を強調することは、決してデンマークを貶めるものではないとし、次のようにその独自性の尊重を主張する。

「デンマークのナシヨナリテートは明確に境界づけられた、傑出したナシヨナリテートであり、ノルウェーとスウェーデンのナシヨナリテートに飲み込まれることで自殺するわけにはいかない、というのが〔デンマーク人の大多数の〕意識である」⁽³⁹⁾

しかしムンクは同時に「デンマークのナシヨナリテートの救いはデンマーク的であることにあり、ノルウェー性やスウェーデン性に属するようなもの、あるいはドイツ性に属するものいづれかを横取りすることにあるのではない」⁽⁴⁰⁾とも述べている。その言い回しには、むしろデンマーク人が古北欧文学への権利を主張することへの嫌悪感にじみ出ており、尊重よりも敬遠のレトリックとしての性格が強まっていると言えよう。

それでもこの時点でのムンクは、デンマーク国家は北欧ともドイツとも政治的に連合すべきでないとして、その一体性の維持を主張していた。当時取り沙汰されたデンマーク領土の分割とプロイセン・スウェーデンによる併合案について、一方ではデンマークへのロシアの影響力拡大を、他方では強化するスウェーデンとノルウェーとの不均衡

を拡大することになると懸念し、ドイツ人を利するだけだと指摘した⁽⁴¹⁾。そのうえで、ムンクはスカンディナヴィア主義思想の「政治的―王朝的側面」が取り除かれるなら、自分分は「精神的・学術的スカンディナヴィア主義」の熱心な擁護者になりえただろうと述べる⁽⁴²⁾。先述のように「あらゆる『スカンディナヴィア主義』への拒絶を表明したにもかかわらず、スカンディナヴィア主義を完全に否定する論理を提示することは容易ではなかったのである。

このようにデンマークの「ナシヨナリテート」を論じることでスカンディナヴィア主義への反駁を試みる一方、一八四九年のムンクはナシヨナリテートを政治的原理とすることへの懐疑も示した。ムンクはオーストリア・ハンガリーの情勢に言及し、マジヤール人とスラヴ人とのナシヨナリテートの対立が、クロアチアのイエラチッチ (Josip Jelacic 一八〇一―五九) をしてハプスブルクの「帝室」と「反動派」に協力させたとする。ムンクは、大陸においてこうした自由の抑圧と「専制あるいは無秩序」を導いているのが、他ならぬ「平等とナシヨナリテート」であると指摘した⁽⁴³⁾。なお、先述した『民衆読本』の論文でも、ムンクはオーストリアのスラヴ人の動向やイエラチッチに言及して、「ドイツ人をしてデンマークを侵略せしめたのはナシヨナリテート狂信主義であり、オーストリアのスラヴ人

をして宮廷党と協働せしめたのはナシヨナリテート狂信主義である」と述べていた。⁽⁴⁴⁾ ムンクのナシヨナリテート運動に対する警戒感には、それまでのドイツ統一運動のみならず、スラヴ人の動向も無視できない影響を与え始めていた。

(4) スカンディナヴィア主義の「非実際」性と

デンマークの「首位性」

ムンクが五月に発表した論文は、公私にわたるライヴアルであった歴史学者ドー (Ludvig Kristensen Daa 一八〇九—七七) による「デンマーク・ロシアのか、スカンディナヴィアのか」と題する新聞連載論文への反論が契機であった。ドーは、デンマークのナシヨナリテートに関するムンクの議論を逐一批判し、スカンディナヴィアは規模の拡大による軍事的安全の確保を目指すべきだとして、三国の政治的連合を強く主張した。⁽⁴⁵⁾

ムンクはこれまでデンマーク人の「首位性」への願望について、彼ら自身の政治・歴史両面における欲求を指摘してきたが、ここでは、客観的条件のゆえにコペンハーゲンが必然的にスカンディナヴィア主義の「首座」「根拠地」となると説く。その条件とはたとえば、充実した王宮・聖堂の存在、気候の快適さ、土地の美しさ、また外国との連絡の容易さなどである。これらの点から、コペンハーゲン

ノルウェーの歴史家ムンクのスカンディナヴィア主義論

を「(連合の) 君主家は喜んでその居住地に選ぶ」ことになり、連合王国の宮廷は「デンマーク宮廷」と、また内閣は「デンマーク内閣」と呼ばれることになる⁽⁴⁶⁾と予想する。ドーの連合構想では、既存のノルウェー・スウェーデン連合へのデンマークの加入が前提であり、そこでのデンマークの優位はありえないとされた。⁽⁴⁷⁾ これに対してムンクが「デンマークとのそうした連合への懸念はまったく大げさなものではない。まさにデンマークがデンマークであり、自然やその他の条件によって北欧の他の国々よりも好ましいがゆえに」、⁽⁴⁸⁾ と述べる⁽⁴⁸⁾とき、彼のスカンディナヴィア主義批判には、文化の中心地としてのデンマークへの敬意とその裏返し⁽⁴⁸⁾の劣等感が垣間見える。

次に軍事的観点からのスカンディナヴィア連合の必要性が検討される。ドーはスウェーデン・ノルウェーへの軍事的脅威を強調し、列強の援助を当てにせず⁽⁴⁹⁾に自らを守る力が必要だと主張した。とりわけ、デンマークにおけるロシアの影響力の増大に懸念を示すとともに、スリースヴィ分割によってドイツ・ロシアからの干渉を排除するよう提案した。⁽⁴⁹⁾ これに対して、ムンクの情勢認識はかなり楽観的である⁽⁴⁹⁾と言つてよい。ムンクは、ドイツ情勢について、自由主義者たちは君主たちの利害に絡め取られて「正確な立ち位置」を見いだしておらず、オーストリア・プロイセンな

どの「反動的な」君主たちも自由主義運動に勝利できていないとする。したがってドイツの脅威は減少しており、その「侵略」に対抗するためのスカンディナヴィア連合の必要性はないと判断しているのである⁽⁵⁰⁾。

ムンクはまた、そうした連合がバルト海の入りを扼することで列強を刺激する危険性も指摘した。ロシアが敵となる場合には、「広い海流」で隔てられたデンマークとの連合に戦略的な意味はなく、逆に大陸と領土上の連続性をもつことで不必要な戦争に巻き込まれる可能性があるとも指摘する⁽⁵¹⁾。ドイツからの脅威が去ったと判断する一方で、ロシアを仮想敵とする前提での情勢判断に傾いていた点では、ムンクもドーと共通している。

ここでムンクは、三国が連合するのではなく、それぞれ独立したままでゲルマン主義へと包摂される時機を待つべきだとした。そのためにデンマークがスリースヴィを失うこともありえるが、「デンマークはたとえスリースヴィなしでも、少なくともオランダより大きいか、同じくらいの大きさなのであり、オランダのように尊敬に値する役割を果たすことができる」として、そうした可能性さえも容認した⁽⁵²⁾。スカンディナヴィア主義への批判のなかで、ムンクにとってデンマーク国民国家の一体性の維持が二次的な問題に後退していたことが露わになっている。

この年の五月から六月にかけて、ロシアはプロイセンに対して休戦への圧力を再び強め、また海軍をデンマーク近海に出動させて介入の度合いを深めていた⁽⁵³⁾。ムンクがデンマーク国家自体に冷淡な態度を示すようになっていったとすれば、デンマーク政府の保守化と同時に、その背後にロシアの影を見たことも一因であろう。

(5) パンゲルマン主義への傾斜とデンマークの敬遠

歴史学を織り込んだムンクのスカンディナヴィア主義批判には、デンマークからも反論が寄せられていた。七月にムンクはヴォーソーを名指しで批判する論文を連載し、デンマークにいたゴート人が「ノルド系」ではなく「ドイツ系」民族であることを、鉄器・青銅器の分布やルーン碑文の文字に関する知見なども交えて論じた⁽⁵⁴⁾。ここでムンクが強く反応したのは、やはり古北欧文学の問題であった。ヴォーソーが中世においてノルウェー語とアイスランド語は別物であったと指摘したのに対して、ムンクは「アイスランドはノルウェーのものであり、ノルウェーのもの以外の何ものでもなく、ひとえにノルウェーのものであり、スウェーデンのものではなく、ましてやデンマークの入植地ではなかった」と、かなり感情的な調子で反論した。そしてヴォーソーらがそれを認めないことを、学問上の意見の

相違としてではなく、「特殊な反ノルウェー主義」「政治的——ナショナルな偏見」「狂信主義」という悪意を含んだ政治的意図として理解した。⁽⁵⁵⁾

一方、ムンクはこの論文で、より具体的に「パンスラヴ主義」との対決を念頭に置いて、「あるスラヴ国家」が北歐を侵略しようとするならば、スカンディナヴィア主義ではなくパンゲルマン主義によつてしか対抗できないと主張した。また、デンマークに対するドイツ人の「不法」を引き続き確認しながらも、「スカンディナヴィア主義がなかったら、このような戦争、このような憎しみは起こったであろうか」として、スリースヴィ戦争に対するデンマーク側の責任も問いかけた。⁽⁵⁶⁾

一連の論文の最後となる八月の「L・K・ドーのスカンディナヴィア主義的争論について」で、ムンクは南方からの民族移動を主張するドーに対し、地理学・言語学・考古学の広範な議論を通じてデンマークとノルウェー・アイスランドとの違いを強調した。ムンクは、北欧三国の連合が絶対に必要ならば連合すればよいと言いつつも、その根拠にデンマーク人との「親戚関係」を挙げることこそが重大な問題であると指摘した。そのうえで、自らの主張はデンマーク人が「かの偉大なゴート民族の輝かしい記憶」を所有する権利を擁護するものであるとして、デンマーク人

を北歐から敬して遠ざける姿勢を一段と強めた。⁽⁵⁷⁾ ムンクがスカンディナヴィア主義批判とともにデンマークへの距離感を広げるなかで、その論争の原動力は、好転しつつあったデンマーク情勢よりも歴史学の問題へと移っていたのである。

この論文の発表後、ムンクは翌年にかけてイギリス方面への史料収集に赴き、終戦までデンマーク情勢・スカンディナヴィア主義に関する目立った発言は見られなくなる。

六、おわりに

本稿で検討したように、ムンクのスカンディナヴィア主義への態度は第一次スリースヴィ戦争開戦後の一八四八年から四九年にかけて大きく変化した。一八四八年にはきわめてスカンディナヴィア主義的な言説を用いながらデンマークへの軍事的支援を訴え、デンマークのナショナルリベラルの動向にもおおむね好意的であった。翌一八四九年になるとスカンディナヴィア主義を批判する態度を明確にし、その非歴史性と非実理性、デンマークの「首位性」を主な問題点として議論を展開した。しかし、政治的連合抜き「精神的」「学術的」スカンディナヴィア主義への支持を示唆するなど、スカンディナヴィア主義との差別化は

容易ではなかった。スカンディナヴィア主義を棚上げしてゲルマン主義に活路を見いだそうとした姿からは、少なくともノルウェー知識人がスカンディナヴィア主義に接触するなかで、デンマーク人への敬意と幾分かの劣等感を抱くムンクにとっても、スカンディナヴィア主義を完全には否定しきれなかったジレンマが見て取れる。ムンクは一八四九年の間にも「パンゲルマン主義」への傾斜を強め、デンマーク国家の事情は次第に後景に追いやられていった。その背景にはロシアを筆頭とするスラヴの脅威への認識があると同時に、歴史学上の論争自体がムンクにスカンディナヴィア主義との対決姿勢を求めた面もある。その意味で、この時期の「パンゲルマン主義」や「コスモポリタン」といった言説には、スカンディナヴィア主義批判の反作用という性格が強かったと言える。

また、これと並行して「移入理論」をめぐるムンクの歴史観が開戦後に大きく変化したことも確認した。ムンクはこの理論によって、一八四八年にはデンマークの「北歐性」を、翌四九年には逆に非北歐的な「ゴート性」を論じたが、少なくとも後者は政治的議論に連動して形成された面が大きい。スカンディナヴィア主義者が北歐の歴史的一体性を主張するとき、それは歴史家ムンクの一貫した課題であった古北歐の文学・言語への「所有権」の問題を刺激

せざるを得ず、そのことがまた政治的論争へと還元されていたのである。したがって、一八四九年における反スカンディナヴィア主義的歴史論は、ムンクの歴史学の一貫した主題というより、動的な派生部として見るべきものであろう。サイプは一八四八・四九年を一括してそれまでのムンクからの「政治的転向」としたが、むしろこの兩年の間にこそ、彼の政治的立場と歴史学的立場の両面における「転向」を見いだすべきではないだろうか。

註

- (1) スカンディナヴィア主義およびスリースヴィイ問題の概観は、百瀬宏・熊野聰・村井誠人編（一九九八）：『北歐史』、山川出版社、一九七―二四五頁を参照。
- (2) Øystein Sørensen (2001): *Kampen om Norges sjel. Norsk idéhistorie bd.3*, Oslo, s.227-252.
- (3) Jens Arup Seip (1981): *Utsikt over Norges historie. Tidssrommet ca.1850-1884*, Oslo, s.42; 77. 一八六〇年代のノルウェーのスカンディナヴィア主義者については拙稿（二〇〇八）：『歴史家ミカエル・ビルケランの政治的スカンディナヴィア主義―ノルウェー政治史における『官僚身分の救済手段』か？』、『西洋史論叢』三〇 および拙稿（二〇一一）：『クリスチャニア・スカンディナヴィア協会の歴史的意義―ノルウェーにおけるスカンディナヴィア主義の可能性と

限界」、『北欧史研究』二八を参照。

- (4) John Sanness (1959): *Patrioter, intelligens og skandinaver: Norske reaksjoner på skandinavismen før 1848*, Oslo, s.13; 187-188. Sørensen, *op. cit.*, s.232-234.
 - (5) 後述するように、ムンクはこの時期に「ゲルマン主義」「パンゲルマン主義」の語を多用しているが、無論これは一九世紀末以降のドイツ国家の政策と直結する内容をもつものではない。
 - (6) Ottar Dahl (2003): «P A Munch», i Jon Gunnar Arntzen (red.), *Norsk biografisk leksikon bd.6*, Oslo. Ottar Dahl (1990): *Norsk historieforskning i det 19. og 20. århundre* [4. utg.], Oslo, s.60-62.
 - (7) Dahl (1990), s.43-75.
 - (8) Anne-Lise Seip (2012): «Nasjonsbygger og kosmopolitt», i Sverre Bagge; John Peter Collett; Audun Kjusfred.), *P.A. Munch: historiker og nasjonsbygger*, Oslo, s.11-32.
 - (9) Sørensen, *op. cit.*, s.161-263.
 - (10) Sanness, *op. cit.*, s.92-95.
 - (11) ノルウェー語の「ナショナルリテート (nasjonalitet/nationalitet)」は英語の「ナショナルリテティ (nationality)」に語源上対応する。ムンクはこの語を古代の民族に対しても使用する一方、近代的な国家の概念を前提とした「国民性」「国籍」という意味での用例は基本的にない。強いて「民族性」と訳すことも可能であろうが、本稿ではカタカナでの表記とする。
 - (12) この民族移動論での「ドイツ人」は、ドイツ語話者・ドノルウェーの歴史家ムンクのスカンディナヴィア主義論
- (13) Dahl, *op. cit.*, s.63-67. ノルウェーでは一時期圧倒的な影響力をもったが、一八六〇年代にムンク、カイセルが死去すると、考古学・地理学における新たな知見や、民族名に焦点を当てた議論自体が下火になったことと相まって、歴史理論としては後退した。
 - (14) 以下、引用文の括弧内は原綴を除き筆者による。
 - (15) *Ibid.*, s.44; 50; 66. 形容詞でもある *norren* は立場によって「古北欧」「古ノルウェー」のいずれとも解され、現代北欧語の辞書でも解釈は完全には一致していない。
 - (16) *Ibid.*, s.64-67. A.-L. Seip, *op. cit.*, s.22-23.
 - (17) *Morgenbladet*, 3.5.1848.
 - (18) Peter Andreas Munch (1848a): «Danmark maa hjælpes», i Peter Andreas Munch, Gustav Storm (udg.), *Samlede Afhandlinger I, Christiania*, 1873, s.374-378.
 - (19) Peter Andreas Munch (1848b): «Svar til «En Stemme fra Landet» angaaende Krigsspørgsmaalet», i Munch, Storm(udg.), *op. cit.*, s.389.
 - (20) Munch (1848a), s.375-376. Peter Andreas Munch (1848c): «Erklæring i den danske Sag», i Munch, Storm(utg.), *op. cit.*,

s.390-392.

- (21) Munch (1848c), s.389.
- (22) *Ibid.*, s.393.
- (23) Munch (1848b), s.387.
- (24) *Ibid.*, s.386-387.
- (25) Narve Bjørge; Øystein Rian; Alf Kaartvedt (1995): *Selvstendighet og union: fra middelalderen til 1905: Norsk utenrikspolitiks historie bd.1*, Oslo, s.278-279. Henrik Becker-Christensen (1981): *Skandinaviske drømme og politiske realiteter: den politiske skandinavisme i Danmark 1830-1850*, Århus, 1981, s.218-223.
- (26) Bjørge; Rian; Kaartvedt, *op. cit.*, s.279. Becker-Christensen, *op. cit.*, s.211-215. Åke Holmberg (1946): *Skandinavismen i Sverige: vid 1800-talets mitt (1843-1863)*, Göteborg, s.172-176. なお、ムンクは五月一六日の論文で、ドイツよりもロシアへの対応を主張する批判者に反論し、列強はロシアによる北欧の支配を容認しないため、目下ロシアからの脅威は無いと主張した。スカンディナヴィア主義者たちのロシア脅威論との対比で注目すべき点がある (Munch 1848b, s.383)。
- (27) Peter Andreas Munch[anonymt] (1848d): «Det nye danske ministerium» i *Morgenbladet* 1.12.1848. 筆名のはじめは Bagge; Collett; Kjust(red.), *op. cit.* 巻末の文献リストによる。
- (28) Peter Andreas Munch (1849a): «Udsigt over de revolutionære Bevægelser i Aaret 1848», i Peter Andreas Munch, Gustav Storm (udg.), *Samlede Afhandlinger II*, Christiania, 1874, s.300-310; 352. 後述する Munch (1849b) で本論文が引用されているため、三月半ばまでに発表されたものと思われる。
- (29) *Ibid.*, s.326; 339.
- (30) *Ibid.*, s.327.
- (31) *Ibid.*, s.327-328.
- (32) Peter Andreas Munch (1849b): «Om Skandinavismen», i Munch, Storm (udg.), *op. cit.*, s.16-20. 五世紀以降、ノルド人の一派「デーニン人」(Danerne) がユトランドへ移住したことでデンマークはノルド人の地となったという。なお、現在のスウェーデン南部の「ユータランド」(Götaland) の名称はゴート人の故地を表すとも理解されていたが、ムンクはノルド系民族の「ユート人」(Göter/Göter) とドイツ系民族の「ゴート人」(Göter) は別物であるとかねてから主張していた (Dahl, *op. cit.*, s.65-66)。
- (33) Munch, *op. cit.*, s.29-31.
- (34) *Den norske Rigstidende*, 13.4.1849; 14.4.1849.
- (35) Peter Andreas Munch (1849c): «Mere om Skandinavismen», i Munch, Storm (udg.), *op. cit.*, s.44-50.
- (36) *Ibid.*, s.50-51.
- (37) Munch (1849b), s.35.
- (38) *Ibid.*, s.42.
- (39) Munch (1849c), s.51.
- (40) *Ibid.*, s.53.
- (41) *Ibid.*, s.57-58. フレゼリク七世の継承者選出がデンマークの課題となるなか、デンマークがロシアの王子を王太子に

迎えるとの噂が広がっていた。これに対して、スウェーデンの Karl 王太子 (Karl 後の Karl 十五世。王位一八五九―七二) 周辺では、デンマーク国民のロシアへの反発を計算に入れて、スリースヴィ・ホルシュタインをドイツに編入し、残りのデンマークをスウェーデンと連合させる可能性への期待が高まっていた (Holmberg, *op. cit.*, s.188-192)。

- (42) Munch (1849c), s.57-58.
- (43) *Ibid.*, s.53-55.
- (44) Munch (1849a), s.338-348.
- (45) Ludvig Kristensen Daa (1849): *Danmark - russisk eller skandinavisk*, Christiania.
- (46) Peter Andreas Munch (1849d): «Bemærkninger ved L. K. Daas Skrift "Danmark russisk eller skandinavisk"», i Munch, Storm (udg.), *op. cit.*, s.63-65.
- (47) Daa, *op. cit.*, s.25.
- (48) Munch (1849d), s.64.
- (49) Daa, *op. cit.*, s.10-15; 55-60.
- (50) Munch, *op. cit.*, s.66-71.
- (51) *Ibid.*, s.71-72.
- (52) *Ibid.*, s.81-82.
- (53) Becker-Christensen, *op. cit.*, s.236-237.
- (54) Munch (1849e): «Skandinavismen nærmere undersøgt med Hensyn til Nordens ældre nationale og literære Forhold», i Munch, Storm (udg.), *op. cit.*, s.115.
- (55) *Ibid.*, s.115-116; 125-126.

- (56) *Ibid.*, s.90-92. サイプが挙げるようにムンクが自らを「コスモポリタン」と称したのは、このスカンディナヴィア主義批判の文脈においてである (*Ibid.*, s.87)。
- (57) Munch (1849d): «Om L. K. Daas skandinaviske Polemik», i Munch, Storm (udg.), *op. cit.*, s.128; 134.